

2021. 2. 14 (日) マタイ23:29~33

23:29 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者たちの墓を建て、義人たちの記念碑を飾って、

23:30 こう言う。『もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者たちの血を流すということはなかっただろう。』

23:31 こうして、自分たちが預言者を殺した者たちの子らであることを、自らに対して証言している。

23:32 おまえたちは自分の先祖の罪の升を満たすがよい。

23:33 蛇よ、まむしの子孫よ。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうして逃れることができるだろうか。

<説教>

「外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいだ」(23:28)とイエスは律法学者、パリサイ人の偽善を鋭く指摘なさいました。

なるほど、〈聖句を入れる小箱を大きくしたり、衣の房を長くしたりする〉(5)こと、〈人々から先生と呼ばれ〉(7)、〈一人の改宗者を得るのに海と陸を巡り歩く〉(15)熱心さ、〈ミント、イノンド、クミンの十分の一を納めている〉(23)真面目さ、献金または献身の徹底した様子等々、これら〈外側〉が心から神を愛し人を愛する心〈内側〉によって出てくるものであればよかった。

しかし律法学者やパリサイ人の〈内側〉は専ら自己愛、自画自賛、神と人の前に誇り、人を見下し、神を見損なっていました。

どう考えても、どう見ても〈生ける神の子、キリスト〉でなければできないわざをイエスが何回も行い、またどう考えても、どう聞いても〈生ける神の子、キリスト〉でなければ語ることができない言葉を何度も語って来られたのに、彼らはそれを悪魔や悪霊のわざや言葉だと頑固に言い張って来ました。

そしてイエスをねたみ、憎み、殺そうと決心していました。

イエスのみわざとみことばによって自分の内に語りかけられる聖霊の示し、促しをことさらに拒み、神の前に自分の罪を言い表すことを拒んでいました。

イエスを信じることを拒み、悔い改めを拒んでいたのです。

そうやって自分は神と人の前に正しい、神と人の目に〈義人〉だと言い張り、見せつけていました。

しかし、「人はうわべを見るが、主は心を見る。」(Iサムエル16:7)のです。

律法学者やパリサイ人がこの神のことばを知らないはずがなかったのですが…。

彼らは頑なに、〈強欲と放縦で満ちている〉(25)、〈あらゆる汚れでいっぱい〉(27)、〈偽善と不法でいっぱい〉(28)な心を神と人の前に認めようとせず、ひた隠しにし、誇り高ぶっていました。

イエスはそんな彼らを〈白く塗った墓〉と言い放ち、断罪なさいました。

そして〈墓〉の話をしたからかどうかは分かりませんが、〈墓〉に関連して、彼らにここで6回目の〈わざわい〉の宣告をなさいました。

23:29 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者たちの墓を建て、
義人たちの記念碑を飾って、
23:30 こう言う。『もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者
たちの血を流すということはなかっただろう。』
23:31 こうして、自分たちが預言者を殺した者たちの子らであることを、自らに対して証
言している。
23:32 おまえたちは自分の先祖の罪の升を満たすがよい。
23:33 蛇よ、まむしの子孫よ。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうして逃れることができ
るだろうか。

律法学者やパリサイ人は（旧約）聖書に書かれている〈預言者たち〉〈義人たち〉のこ
とをよく知っていました。

本物のまともな〈預言者たち〉は皆、人を恐れず王をも恐れず、その顔色をうかがうこ
となく、神だけを恐れて、神から預かり託され命じられた言葉を人々に（神の民イスラエ
ルに、また時にはイスラエル以外の諸国の民にも）語りました。

神が〈預言者たち〉をご自分の代理人として人々にお遣わしになりました。

それで〈預言者たち〉は、人が気に入り喜ぶことではなく、たとえ人からあざけられよ
うと、忌み嫌われよう、憎まれよう、迫害されよう、一切かまわず、神がお喜びに
なること、神のみこころを語りました。

人の罪をはっきりと指摘し、神に信頼して悔い改めて神に立ち返るようと語りました。

それで、そういう〈預言者たち〉は必ず人々からあざけられ、忌み嫌われ、憎まれ、迫
害されたのです。

語ることを禁じられ、さらし者にされ、牢屋に入れられ、ときに殺される者もいました。

そのように、神のことばと神の証しのゆえに、罪と戦って血を流すまで抵抗し、神の真
理を語り、神の真実を証しし、神の栄光を現したのが神の〈預言者たち〉でした。

なお〈預言者たち〉と〈義人たち〉とはここではほとんど同じ意味のように思いますが、
もちろん〈預言者〉として立てられていないという意味で普通の人でも神に信頼し神に従
い、人々に神のことばを語り、悔い改めを迫った〈義人たち〉もいたでしょう。

そしてそういう人々もやはり人々からあざけられ、忌み嫌われ、憎まれ、迫害されたこ
とでしょう。

神の民イスラエルの歴史は、神から受けた恵みをすぐに忘れて不信仰と不従順に陥る民
をなおもあわれみ愛し、ご自分の〈預言者たち〉を遣わして民に悔い改めを迫る神と、な
おも神に反逆し続ける民の歴史と言えるのです。

もちろんそれだけの歴史ではありませんが、今日、ここでイエスが問題にしているのは
まさにそこです。

そういう反逆の民である自分たちの〈先祖〉が犯した罪の歴史から、律法学者やパリサ
イ人は教訓を学んでいたか、自分たちも同じ罪を犯していると気づき、認めていたか。

全然そうではありませんでした。

「もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者たちの血を流す
ということはなかっただろう。」とまるで他人事（ひとごと）、自分たちは〈彼らの仲間〉

ではない、関係ないと言わんばかりでした。

自分たちは大丈夫だ、と一体どこからそんな自信が出て来るのか。

〈きよめ〉られていない〈内側〉から、ということなのでしょうが。

それで〈外側〉では〈預言者たちの墓を建て、義人たちの記念碑を飾って〉、自分たちは〈預言者たち〉〈義人たち〉の言うことを、つまり彼らを通してお語りになる神にの言われることを聞いて従ったに違いないと自分たちの〈義人〉ぶりを〈人に見せ〉つけていました。

つまり自分たちがいかに信仰深いか、神を愛し人を愛しているかをひけらかしていたのです。

しかしそれは全く偽りの〈証言〉でした。

イエスはそれは「自分たちが預言者を殺した者たちの子らであることを、自らに対して証言している」だけだ、と本当のことを言われました。

あなたがたは〈先祖〉の〈子〉として、〈預言者を殺〉す、つまり悔い改めることなく神に反逆する精神、殺人者の精神だけはしっかりと〈先祖〉から受け継いでいることを図らずも自分で白状したのだと、イエスは指摘なさいました。

だから本当なら、自分たちも〈先祖〉と同じく神と神が遣わした〈預言者たち〉に聞き従わない反逆者、殺人者であることを認めて、神の前にへりくだって、悔い改めて、神（イエス）にあわれみを求めるべきでした。

『もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者たちの血を流すということ』をしていたに違いない。でも確かに今は〈先祖の時代〉とは違う。ならば今すべきことは〈先祖の時代〉の歴史から、〈先祖〉の失敗、いや罪とその結果から教訓を学ぶべきだ。今度こそは〈預言者たちの血を流す〉罪を犯さないように、〈先祖〉と同じ〈内側〉を神（イエス）によってきよめていただこう。」

そのように〈自らに対して証言〉して、イエスを信じて悔い改めるべきでした。

しかし彼らは今や聖霊に逆らい、唯一人の完全な〈預言者〉〈義人〉であるイエスをあざけり、忌み嫌い、憎み、ねたみ殺そうと、もうどうしようもない所まで心を定めてしまっていました。

そうやって〈おまえたちは自分の先祖〉さえもできなかった、神の子キリスト、おまえたちが待ち望んでいたはずのメシヤを殺すという〈罪の升を満たすがよい〉、そうイエスは宣告さなさいました。

どこまでもイエスへの信仰なき、悔い改めなき〈蛇〉〈マムシの子孫〉、即ち悪魔の子らは神による〈ゲヘナの刑罰〉を〈逃れることはでき〉ないのです。